

稲作気象台情報第3号

発行:平成28年9月7日
東播磨農業改良普及事業協議会

平成28年9月7日、管内12箇所の水稻調査地点で病害虫発生予察を行なった結果、病害の発生は少なく、坪枯れを引き起こすトビイロウンカ（秋ウンカ）の発生も確認されませんでした。しかし、斑点米の原因となるカメムシ類の防除が必要な基準を超えているほ場がありましたので、今後の発生状況に注意してください。

1. 8月以降の気象概況

○これまでの経過

平均気温は平年より高く推移しましたが、29日の降雨以降低くなっています。日照時間は平年より多く、降水量は平年より少なく経過しました。

○今後の見通し

気象庁発表の1か月予報では、天気は数日の周期で変わり、平年に比べ曇りや雨の日が多いと予想されています。

2. 病害虫の調査結果(平成28年9月7日調査)

<病害>

	穂いもち	紋枯病	縞葉枯病
発生状況等	確認せず	少ない	確認せず

葉いもちの発生は、調査12地点中2地点（明石市、加古川市）で確認されましたが、発病株は少なく、程度も少でした。穂いもちの発生は確認されませんでした。

紋枯病の発病についても3地点（高砂市、加古川市）で確認されましたが、発病株は少なく、程度も少でした。縞葉枯病の発生は確認されませんでした。

<虫害>

	ヒメトビウンカ	セジロウンカ	トビイロウンカ	ツマグロヨコバイ
発生状況等	少ない	少ない	確認せず	少ない

ウンカ類は、今年の同時期や前回の調査（8月4日）に比べて、発生は同程度、または少なく、坪枯れを引き起こすトビイロウンカ（秋ウンカ）の発生は確認されませんでした。

斑点米の原因となるカメムシ類の発生は、12調査地点中6地点で確認され、防除が必要な密度（捕虫網40回振りで3頭以上）となっているほ場がありました。

3. 今後の管理について

(1) 水管理

①稲の根の活力を保つため、間断灌水を実施してください。

②早期の落水を避け、収穫1週間～10日前までは間断灌水を続けましょう。

③落水後、あまり乾燥が続くようであれば、走り水を行ってください。

*温度が高く、落水時期が早いほど、乳白粒や腹白粒、未熟粒などが増え、整粒歩合が低下する傾向があります。品質低下を避けるため、あまり早い時期からの落水は控えましょう。

*刈り取り時期の目安は、籾の黄化率（黄色くなった籾の割合）が85～90%になったと

きです。但し、刈り遅れは、胴割れ米や茶米の発生原因にもなるので適期収穫に努めましょう。

(2) 病虫害防除 (薬剤散布は使用基準を遵守してください)

＜トビイロウンカ（秋ウンカ）・斑点米カメムシ類＞

今回の調査で発生は確認されませんでした。9月下旬以降のトビイロウンカ増殖による坪枯れが、成熟期の遅いヒノヒカリ等の晩生品種の収量・品質に大きく影響します。トビイロウンカは稲の株元に生息しますので、今後も発生していないか、注意深く観察を継続しましょう。

乳熟期を迎えるヒノヒカリでは、斑点米の原因となるカメムシ類への対策が重要です。基幹防除を行っていない場合は、早急に薬剤防除を実施してください。

なお、カメムシ類への防除は、同時にウンカ類やツマグロヨコバイへの防除効果が期待できます。粉剤等を使用する場合は、株元まで薬剤がかかるよう丁寧に散布しましょう。

薬剤名(例)	使用量	使用期限	対象害虫
スタークル粒剤	3 kg /10アール	収穫7日前まで	ウンカ類、ツマグロヨコバイ、カメムシ類
スタークル豆つぶ	250 g /10アール		
トレボン粉剤DL	3～4 kg /10アール	収穫7日前まで	イネツトムシ、カメムシ類、ツマグロヨコバイ、ウンカ類、コブノメイガ、イナゴ類、ニカメイチュウ、フタオビコヤガ

*薬剤等についてはJA水稻栽培暦を参照してください。

＜スクミリングガイ（ジャンボタニシ）＞

今年は5月頃より食害の報告が多くありました。来年へ向けて被害を軽減するために、地域ぐるみで生息密度の低下に取り組みましょう。

- ①ロータリー耕耘で機械的に貝を破砕し、密度を低下させましょう。冬季や田植え前の耕耘でも効果はありますが、水田の土が硬い水稻収穫後が最も効果的です。深さは6 cm程度、ロータリーをできるだけ高速で回転させ、通常の1/2以下の速度で実施します。また、稲刈り後若しくは田植え前に、荒起、湛水し、石灰窒素を施用後、代かきして殺貝する方法もあります。(ただし15℃以上の水温が必要)
- ②田畑輪換を取り入れた作付けを実施しましょう。夏作に大豆等の畑作物を栽培すると貝の密度が著しく低下します。ただし1年の畑作では絶滅しません。また水路からの侵入対策として、メッシュの金網や網袋など侵入防止網を設置することが重要です。(移植栽培は9 mm目、湛水直播は6 mm目)
- ③用水路などの泥さらいを実施して貝を退治(補殺)しましょう。夏に生まれた貝は秋に1～3 cmとなり、通常、土中で越冬し翌春に活動を再開します。しかし寒さには弱く、マイナス3℃では2日以内にほとんどの個体が死滅し、西日本での野外の越冬率は10%未満とされています。また、田植え前後に2 cm以上の貝の補殺も被害軽減効果が期待できます。

あかし農業協同組合 本店 078-934-5800
ホームページアドレス
<http://www/ja-akashi.or.jp/>